

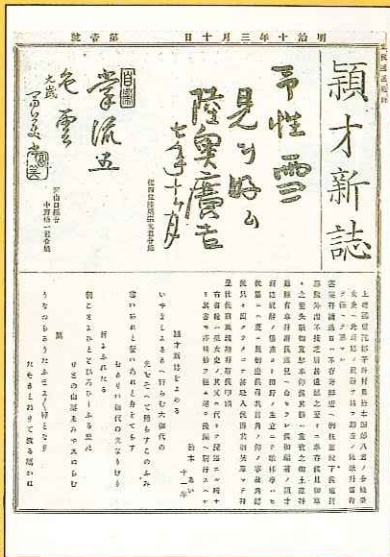


東京府下  
南豊島郡喜多川村  
朝生 清方

えいさいしんし

# 穎才新誌

〔復刻版〕



一八七〇〜九〇年代、  
近代あけぼのの都市・地方青年層の  
新思想を体現した幻の投稿雑誌の復刻版！  
後に多くの文化人・政治家を輩出し  
「明治文学の幼稚園」とも呼ばれた本誌は、  
近代思想史・教育史・文化史研究に必須の資料！

不二出版

全一〇巻・別冊一

一八七七(明治10)年〜一八九八(明治31)年

B5判上製・総一〇、六七六ページ

解説上 筆一郎

本体揃価格 四六〇、〇〇〇円(税別)

七五年十月五日

中山茶屋



山口縣下周防國久可郡柱島村産  
東京淺草片町六番地寓

定税送送免許

# 穎才新誌

美濃國加茂郡  
越原村越原學校

下等第二級生

五斗俊介男

五斗俊介



青森縣下

福次郎四女

淺利つる

明治十年十一月十七日 第三十七號

# 文 明

明治十年五月

長野縣下

平民熊吉二男

丸田秀雄

十三年八月

東京ニ在ル友人ニ寄スルノ書

護テ恩簡ヲ裁シテ某ノ足下ニ呈ス熟ラ往昔ヲ回顧スレバ余ノ足下ト  
 訣祖シテヨリ茲ニ年ヲ閱スルコト三ツビ甚シ非哉余ノ隔絶スルヤ未ダ  
 嘗テ一芥ノ恩書以テ足下ノ賑食ヲ奉セス然リト雖モ知己ノ情日夜懸  
 眷寢食ノ間モ未タ嘗テ之ヲ忘レズ尙ホ鳥雀ノ東飛スルヲ見レバ輒チ  
 空際ヲ吟望シテ措カズ然ラバ則チ固ヨリ世俗ノ交友ニ於ケル如ク其  
 文ヲ兄弟ニシ其情ヲ胡越ニスル者ノ比ニ非ズ想フニ足下モ亦深ク之  
 ヲ尤メズ伏テ惟ミルニ方今我國大ニ開ケ百事緒ニ就キ偏隅僻鄙ノ別  
 ナク學校ヲ設爲シ今ヤ行ク所トシテ學校ノ設立セザルハナク是ニ於  
 テヤハ々皆子弟ヲ入學セシメ共ニ琢磨以テ進級ノ速速ヲ角逐シ凡百  
 モ亦駁々乎トシテ文明ニ進マント大眞ニ千載ノ盛事ト謂ツ可シ然リ  
 ト雖モ偉業ヲ立テ國家ノ望ニ副ヘント欲スル者ハ必ズ京洛ニ加シハ  
 ナレ京洛ハ賢人君子ノ輻湊スル所碩學博識者ノ彙集スル所ナレバナ  
 リ故ニ君子ノ爲アラントスル者ハ必ズ京洛ニ於テス足下亦夙ニ是ニ  
 見アリテ曩ニ京洛ニ出テ遊學シ加之ラズ資姓敏捷學ヲ好シ志操ア  
 リ交ハル所ハ賢人君子ニ非ザレバ博學多識ノ人ヲ友トシテ研窮スル  
 所ハ經世濟民ノ學將ニ他日偉業ヲ成就セントス余ノ瞻眼ヲ刮レテ以  
 テ成業ノ期ヲ待ツアラン而已然リト雖モ余亦之レヲ聞ク得難ククシ  
 テ而シテ失ナヒ易キ者ハ時ナリ足下ト實ニ偉業ヲ成就セント欲セバ  
 今ニ非ズシテ孰レゾヤ足下今ニシテ而シテ斷ゼス益々精窮セバ異日  
 偉業ヲ成就スルヤ期シテ待ツ可シ然リ而シテ我が一郷ノ幸ノミナラ  
 ×國家ノ福何ゾ之ニ如カンヤ足下夫レ之ヲ驕戒セヨ頓首再拜

## 復刻にあたって

本誌は、一八七七(明治一〇)年、自由民権運動のただ中に  
 創刊された週刊の投稿雑誌である。主宰は陽其二・堀越修一郎ほか。  
 小学校生徒・中学校生徒のちには教員など青少年を対象とした、  
 全国的規模の投稿雑誌の先駆であり、発行部数もきわめて多かった。  
 明治初期・中期の青少年たちの文章・絵画・詩歌・書の  
 晴舞台であった『穎才新誌』は、「明治文学の幼稚園」とも呼ばれ、  
 本誌への投稿によって少年少女時代に表現力と文才を磨いた  
 のちの文学者・政治家・学者は少なくない。  
 社会主義者堺利彦、評論家でデモクラットの茅原華山、  
 作家三宅花圃・山田美妙・尾崎紅葉・田山花袋・星野天知、  
 詩人薄田泣菫・野口寧齋・大町桂月、歌人佐佐木信綱、  
 政治家水野練太郎・岡田啓介・岡田良平、宗教学者加藤玄知、  
 教育者佐方鎮子、実業家で三井信託銀行の創立者米山梅吉、  
 図書館学の和田方吉、『婦女新聞』主宰者・福島四郎などの名前が投稿者に見られる。  
 また編集部にも巖谷一六・依田学海・大沼枕山など当時一流の文化人が  
 顔を揃え、少年少女らの投稿に選評を加えている。  
 本誌は西洋文化の移入とナシヨナリズムの高揚の中で  
 青少年がどのような精神構造をもっていたかを測る重要な指標となる。  
 論題は西郷隆盛から男女同権・国会開設等幅広い。  
 とくに国会開設を中心に熟していた自由民権運動期には、  
 全国の青少年や学校教師たちが活発に政治活動をしていった模様が  
 詳しく報道されていて興味深い。  
 さらに教育に関する全国の詳しい情報を集めた「学事要報」欄は注目に値する。  
 一八七〇〜九〇年代日本の、地方も含めた文化・社会状況を  
 生々しく体現する第一級資料として、近代思想史・教育史・文学史研究等  
 あらゆる学問分野で活用されることを期待するものである。

## 関連年表

- 一八六八年 戊辰戦争 (明治一)
- 一八七一年 『横浜毎日新聞』創刊  
郵便開始
- 一八七二年 学制頒布
- 一八七五年 新聞紙条例
- 一八七六年 『近事評論』創刊
- 一八七七年 西南戦争
- 一八七八年 『穎才新誌』創刊
- 一八八〇年 『扶桑新誌』創刊  
国会期成同盟結成
- 一八八一年 自由党結成  
国会開設の詔書
- 一八八二年 立憲改進黨結成
- 一八八三年 改正新聞紙条例
- 一八八四年 秩父事件
- 一八八五年 尾崎紅葉・山田美妙ら硯友社結成
- 一八八八年 『少年園』創刊
- 一八八九年 三宅花圃『数の鶯』出版  
大日本帝国憲法発布
- 一八九〇年 『小国民』創刊
- 一八九〇年 教育ニ関スル勅語発布  
第一回通常議会議召集
- 一八九四年 日清戦争



田邊六一命 娘

田邊(三宅花圃)九歳

一八七八年第六号掲載

推薦のことは(順不同)

### 明治中期の地方文化・思想の総覧誌

大久保 利謙

『穎才新誌』は投書専門雑誌、明治一〇年の創刊である。初期の新聞や雑誌は投書の場合でもあったが、それを専門とした点において明治中期の雑誌ではまことにユニークな存在であつて、それが大当りをとつてよく売れた。明治初期の文明開化の啓蒙は、新聞雑誌によつて疾風のやうに全国各地に波及した。それが一〇年代には全国各地に定着して、政治の面では自由民権運動のひろがりとなり、思想面では自由な批判精神を育成した。『穎才新誌』は、このめばえた新思想を地方青年層から「投書」の形で吸いあげて、中央の論壇・世論の舞台に乗せた。この雑誌の果たした役割はそこにあつたのである。

投書は人物論・歴史論・教育問題、それに詩文や紀行など、そのほかに政治論・地方官批判などにわたり、一四、五年代には折からの自由民権論の反映もみられる。論説はきわめて多彩、また尾崎紅葉・山田美妙・大町桂月・堺枯川・田山花袋などの投書もあり、「明治文学の幼稚園」などともいわれた。

各投書には、題名のほかに投書者名、それに住所・年齢が書いてある。号数で年月はわかる。これを年別・地域別・年齢別などに分類して分析を行なえば、単に教育・文学にとどまらず、より広汎に文明開化期から明治中期にかけての地方の青年・知識層の思想・文化の状況を総覧できる。現在稀覯な『穎才新誌』の復刻完成は、明治中期の地方文化の調査資料として絶大な寄与となるものと、近代史研究者の立場から大いに期待している。

(おおくぼ・としあき 日本近代史)

### 少年少女の表現意欲をかきたてた

唐澤 富太郎

『穎才新誌』は、明治二〇年以後発行された少年少女の歴大な作文集として『少年園』が一九八八年、その復刻の完成を見たことは画期的なことであつたが、その後僅か三年にして引きつづき明治二〇年からのいわば日本最初の児童雑誌ともいふべき『穎才新誌』がこの度全二〇巻別冊一として復刻されるに至つたことはまことに意味深いことである。

本誌は毎週郵送されたものであるが、比較的薄いが日本の少年少女雑誌として大判で魅力的であり、その初めの頁には絵や書が大きく載せられ、つづいて投稿作文が掲げられている。この頃は運動競技などが余り発達していなかつただけに児童たちにとっては他流試合の唯一の晴れの舞台ともいふべきものであつた。内田魯庵なども少年時代に投稿を希望し、学校で高点を取つた作文があると寄稿してもいいかとたびたび先生の許しを請うている。この投稿者の中には後に名をなした人々の名も載っている。

この雑誌こそは日本の児童文化史、児童教育史の研究にとつては生きた資料として無くてはならない貴重なものといふべきであらう。

(からさわ・とみたろう 東京教育大学名誉教授)

### 明治女学史資料の一環としても貴重

上 笙一郎

わたしが『穎才新誌』創刊号より百数十号までの合冊を神保町の友愛書房で買ったのは、三〇年近い以前のことである。当時だつてかならずしも安い値段ではなかつたが、白髪慧眼の友愛書房主の「今はこの値だが、先行き、この幾倍にもなつてしまふよ」の一言で、決心をしたのだつた。

創刊号を見ると、「東京女子師範学校生徒」として、佐方鎮「儉約治家之本」と青山千世「論貧人之子所以受幸福」という投稿文が載っている。前者は後に女子教育者として名を知られた佐方鎮子、後者は山川菊栄の母である。男子投稿の断然多かつたのが現実だが、女子のそれも相応に見られ、明治女学史資料の一環ともなるにちがいない。

『穎才新誌』の研究といつては、佐藤忠男さんが論集「権利としての教育」(筑摩書房)におさめた「論争の場としての少年雑誌」と、和歌・漢詩にかぎつて分析の光をあてた弥吉菅一さんの「日本児童詩教育の歴史的展望」(溪水社)の第一巻くらいしかなく、前者はわたしの合冊本を貸して差上げて成つたもの。このたびの復刻によつて、研究の急速な進展が望まれる。

(かみ・しょういちろう 児童文化研究家)

### 「青年」の誕生を探る

本田 和子

「青年」というカテゴリーは、明治近代によつて産み出されたのではないか。四〇余年におよぶこの時代は、さらにこのカテゴリーを「少年」と「少女」に分化させ、次の時代に手渡しているように思える。そして、これらカテゴリー産出に手を貸したのが、当時続出した若もの向けの雑誌群であり、『穎才新誌』は、その最も早い例の一つであらう。

全国の小中学生に、自作の投稿を呼びかけたこの雑誌は、当時勃興しつつあつた出版文化を道具とし、学校教育を通路としつつ、しかも校庭の外で若ものたちと手を組もうとする企てとして、画期的であつた。「活字」と「学校」は、いずれも近代をなすしづける概念に他ならない。本誌は、この両者を結び付け、しかも教科書以外の出版物という形で学校生徒を校外に誘い出す。その上で彼らに「綴り、描く」ことを奨励して、自己を表現し、自らの手で自身を輪廓づける場所を提供したのであつた。

こうして、〇〇中学あるいは女学校という制度的なまとまりとは別に、メディアに媒介された若もの集団が発生する。綴り、描く行為によつて、紙上に自己を表現しつつ誌上で出会う新集団……。ここに、青年期の胚胎を見ることは容易であらう。

『穎才新誌』は、この間の経緯を解明すべく、第一級の貴重な資料であり、復刻の営みは高く評価されねばならない。

(ほんだ・ますこ お茶の水女子大学教授)

### 思想形成史の貴重な資料

久木 幸男

待望久しかつた『穎才新誌』復刻版がいよいよ刊行されることになつた。同誌はいうまでもなく明治期少年投稿雑誌の雄、「真の少年雑誌」は、本誌を以て鼻祖と云ふも不可なきなり(石井研堂)と評され、「全国小学校の児童の晴れの舞台」(内田魯庵)と目されてきた。類似した性格の雑誌は『穎才新誌』の前後にも若干出てはいるが、二〇年以上も存続し、号数一一〇〇をこえたのは、本誌が当時の少年たちの広い支持を集めていたからに違いない。『敷教雑誌』(一八七八年、山形)のような追隨誌が地方で生まれたのも、本誌の評価が高かつたからであらう。

もとより自由作文以前の時代のことであるから、投稿文の多くは論・説・記等の古い文体を踏襲しているが、常套の発想・定型の表現と見なされるものの中にも、少年らしい斬新さを感じさせるものが間々見られる。投稿者中に、後年各方面で活躍した人物が多いという周知の事実と相俟つて、本誌が思想形成史・教育史・社会史・文学史等の貴重な資料であることを示すものである。

このような貴重な資料が手軽に利用できるようになつたことは、誠に嬉しい限りである。この喜びを共にする人の多いことを、心から願う次第である。(ひさき・ゆきお 佛教学教授・横浜国立大学名誉教授)

### 若き日に本誌に投稿した人々



三宅花園 一八六八、一九四三 作家



岡田良平 一八六四、一九三四 文部官、政治家 第五五号 一八七八年

静岡縣下遠江國 私塾塾長 學生徒

岡田 良平 十二年九月

文學可盛論

夫レ國ヲ富シ兵ヲ強シ交易ヲ盛ニスルハ人民ノ品行ヲ正シ而シテ人民ナシテ各々己ノ耻ヲ知ラシメ身ヲ以テ國ニ盡スノ志操ヲ發生セシムルニ在ル也其基ヲ所ハ他ナシ只一ノ文學ニ因ルノミ然ルテ文學ヲ務メズシテ只管國ヲ富シ兵ヲ強シ交易ヲ盛ニセント欲スルハ階ナク



岡田啓介 一八六八、一九五二 海軍軍人、政治家 第一三四号 一八七九年



尾崎紅葉 一八六七、一九〇三 作家

石川縣足羽郡旭學校生徒

岡田 啓介 十一年八月

穎才新誌ヲ讀ム

穎才新誌第百廿四號ヲ閱スルニ冒頭ニ女子ノ弊ヲ論スト題セル奇論一章アリ非本靜治君ノ作ニ係ル再四讀ミテ益々其文ノ巧妙ナルヲ覺フ然レテ其世入チ誠ムル一點ニ至テハ余ト大ニ背馳ス請フ當ミニ之ヲ辨ゼン而シテ女子ノ弊ト云フハ余別ニ説アレテ姑ク之ヲ措ク抑モ井本君ノ所論ヲ見ルニ其旨全ク彼ノ殷討周幽



茅原華山 一八七〇、一九五二 評論家 第二二七号 一八八二年



薄田泣菫 一八七七、一九四五 詩人、隨筆家

○新橋竹枝

東京牛込區牛込南町 茅原 藤太郎 年齢不詳

翠、簾、深、處、晚、風、微、紅、袖、丹、唇、鵲、鴛、鴦、見、說、高、樓、春、總、好、此、時、幽、興、最、芳、菲。

社評 婉麗絶佳

○梅雨初晴

全 西窪城山町 奈 和 桂 藏 年齢不詳

梅雨連旬初放晴。閑 菽、詩、句、出、門、行、荷、香、十、里、蛙、聲、聞、新、月、半、響、涼、氣、清。



堺 利彦 一八七〇、一九三〇 社会主義者 第二八八号 一八八二年



田山花袋 一八七〇、一九三〇 作家

○風説

福留縣仲津郡豐津町 堺 利彦

觀ント欲シテ觀ル能ハス口草木ニ觸レテ憂々ノ聲ヲ聞ク者ハ風也夫レ風ノ起ルヤ氣聊カ欠ケル所アレハ他ノ氣之ヲ補ハント欲シ其欠所ニ突入シ煽動ヲ起ス者也然而寒帯ヲ過キ來ル者ハ冷ニシテ熱帯ヲ過キ來ルハ暖ナリ花ヲ吹テ來ル者ハ芳ニシテ穢テ來ル者ハ臭ナリ夫レ風ハ物ニ由テ寒暖芳臭ヲ分ツ人ハ友ニ由テ賢愚善惡ヲ異ニス少年豈ニ鑑ミサル可ンヤ風ハ無心ニシテ能ク心アルカ如シ人ニ於テ蓋シ益ナシトセス人ニ於テ或ハ風ニ劣ル者アリ何トナレハ風ハ冬日雪ヲ吹テ寒カラシムルモ春日花ヲ吹テ芳ナラシム春日花ヲ散スモ夏夕

# 「美文」で表現された、明治期子ども史料の宝庫

佐藤 秀夫

日本近代の夜明けである明治期の子どもの実態を知ろうとする場合、子どもたちの生の意見や日々のくらしを示してくれる史料の乏しさに当惑することが多い。子どもをとりまく諸環境を準備した、当時の大人たちの施策や論議などに関する史料には事欠かないのだが、当の子どもの自身の表現の遺されているものが少ないのである。この点において、一八七七(明治一〇)年に創刊され、二〇余年間にわたって毎週刊行された『穎才新誌』は、当時唯一の子ども投稿誌であったことから、類まれともいえるべき貴重な史料群となっている。一九〇〇年代に入ると、地方によってはほつほつと小学校の編集する雑誌類が刊行されるようになり、一九三〇年代以降は綴り方普及の流れのもと、子ども文集を主体とする小学校雑誌が一部の学校において定期的に刊行されるようになる。しかし、一九世紀における全国規模での子ども文集となると、この『穎才新誌』の他に類例をみることができない。

紙と毛筆との古い歴史をもつ日本では、「語る」よりも「書きしるす」ことが重視されてきた。この文化伝統の特性によって、日本では維新後ほどない時点で子ども作文の投稿誌が成立しえたとみることができよう。その限りでは、この『穎才新誌』は、国際的にみても、一九世紀子ども史研究上の有益な史料の最たるものといつてよいだろう。

従前「名」のみ知られて、「現物」を通読する機会をうることが困難であった本誌の復刻を、教育史研究者の一人として心から慶びたい。

(さとう・ひでお 日本大学教授)

## 「穎才」の意味

堀越 克明

私は祖父・堀越修一郎を直接には知り得ない。が、このたび不二出版からわが学園教育の祖でもある祖父が有志とともに主宰した『穎才新誌』が復刻されることになり、縁者の一人として真に感慨一入のものがある。実は私共でも二年後に創立七〇周年を控えて、貴重な本誌の収集に努めており、昭和六〇年『穎才新誌』に因んで命名創立した穎明館中学高等学校の野坂健三学監の並々ならぬ作業が続けられている時も、真に不思議なる機縁というものを感じているところである。

祖父たちが、現在からは想像も及ばぬ印刷出版等の手段が極めて困難であったろう時に、何を意図し思い、二〇余年に亘って全国展開の投稿雑誌刊行の事業に傾注したのか。また、所謂、エイ・サイというところぐさま連想される英才ではなく穎才とした真の理由は何か。当時、愛読されていた『孟子』尽心上の中に、「得天下英才、而教育之」とあるが、彼らは敢て天下の英才を得て之を教育す、というのでは諾とせず、正に瑞々しい青い稲穂がまだ確かな形にはなっていないが、鋭き才能、エスプリ、能力を内奥に秘めている当時の小学生や中学生、青少年を対象として、純粹に若い人達と心の交流を熱望していたからこそ、英才では駄目で、「穎」という真に奥の深い文字を選んだのではないか。私は、そのように理解している。今は、わが国の近代文学史、文化発展に寄与した『穎才新誌』の復刻完成とそれを掌中にし、瞻目精読することのできる日の一日も早いことを待望するものである。(ほりこし・かつあき 堀越学園理事長校長)

### 関連図書のご案内

## 横浜毎日新聞 第二期 全45巻別冊1

明治3年(明治19年)刊  
別冊(解説(甘利璋八)・総目次・執筆者索引 全3巻  
A4判・上製・函入・総20,000頁  
揃定価870,000円  
89年5月(93年1月配本完結予定(復刻版))

『横浜毎日新聞』は、明治三年(二月八日(陰曆)、日本で初めての日刊新聞として創刊された。当初は貿易商況記事を中心としていたが、政論新聞時代の展開と共に政治性を帯びていき、明治一二年、沼間守一が同紙を買収し社長につくとも、編集局を横浜から東京へ移し、紙名も『東京横浜毎日新聞』と改め、民権派言論の一翼を担うに至り、我然注目を集めた。日本近代史・政治史・社会史・文化史の研究等に必須の基礎的資料である。

●推薦 内川芳美・北根 豊・羽鳥知之・服部一馬

## 近事評論・扶桑新誌 全11巻 別冊1

林 正明 主宰  
明治9年(明治16年)刊  
別冊(解説(水野公寿)・総目次・索引  
A4判・上製・函入・総4,200頁  
揃定価180,000円  
90年4月(90年10月配本完結(復刻版))

『近事評論』『扶桑新誌』(のちに改題して『政海志叢』)は、ともに林正明の主宰する共同社より発行された民権派の代表的雑誌である。自由主義思想に立つ時事評論誌として明治政府を内外から揺がす諸問題(土族問題・条約改正・朝鮮問題・琉球処分問題などを鋭く論じ続けた。そのラジカルな政府批判によってしばしば発売禁止や発行停止、検閲処分などに遭いながら、新しい視点を提示し続けた本誌を近代史研究に欠かせない資料として復刻する。

●推薦 荒瀬豊・我部政男・後藤 靖・松永昌三・矢沢康祐



## 少年園 全13巻・別冊1

山縣悌三郎 主宰  
明治21年(明治28年)刊  
別冊(解説(滑川道夫)・総目次・索引  
A5判・上製・函入・総7,100頁  
揃定価220,000円  
88年10月刊(復刻版)

本誌は、近代国家形成期の明治二〇年代、学校教育・家庭教育・社会教育と並んで書籍による少年教育を多分に意識した雑誌で、刻苦勉勵して自己の道を切り拓き功成名を挙げ、国家有為の人材となることをねらいとしていた。教育志向の一方、教養・娯楽の分野もふんだんに盛り込み、児童向け総合雑誌の先駆として豊かな内容を誇っており、なかでも特筆すべきは、森鷗外・若松賤子の言文一致体の大胆な試みであろう。

近代日本教育史、児童文学史研究に欠かせない資料として、全一五六号を復刻。  
●推薦 上笠一郎・唐澤富太郎・桑原三郎・佐藤忠男・滑川道夫



山田美妙 作家・詩人、評論家  
一八六八(一八八〇)



大町桂月 詩人、随筆家  
一八六九(一八八五)

### ○眺観堂記

大町 芳 衛

吾友吉田徳君堂ヲ駿河臺ニ作り名ケテ眺観堂ト曰フ蓋シ眺観ノ佳ナルヲ以テナリ堂ハ西南ニ面シ眺観開窓全部ヲ目下ニ見ル其ノ正面ニ當テ壘塞依然トシテ尙ホ存シ緑樹翳鬱タル者ハ皇城ナリ其ノ右ニ當テ坂高ク時チ坂頂社アリ建築宏壯賽者常ニ絶ザル者ハ靖國神社ナリ其左ニ當テ若海渺茫香トシテ極リナシ船艦ノ往來常ニ斷ヘザル者品川海ナリ是レ其ノ遠觀ナリ近之則チ人家楹比相連リ就中白壁ヲ以テ之ヲ作り頗ル壯麗ナル者ハ大學校ナリ眼ヲ右ニ轉ズレバ練兵場アリ



星野天知 評論家、小説家  
一八六二(一九五〇)



米山梅吉 (旧姓和也) 実業家  
一八六八(一九四六)

### 第一中學區第四番公立小學

常盤學校

東京府下平民

上等六級

星野 慎之輔 十五年三月

我國世未タ闢ケサルニ當リ學術猶疎ニシテ唯士人其學術ヲ學フニ過キヌ婦女女子ノ如キハ全ク之レニ關セシメヌ或ハ往々一事一業ヲモ知ラスシテ世ヲ終ルモノアリ實ニ嗟嘆ノ至リナラスヤ今ヤ文運日ニ開ケ月ニ弘マテ殿々乎ト

# 穎才新誌

復刻版概要

体裁

B5判・上製

総一〇、六七六ページ

一八七七(明治10)年〜一八九八(明治31)年

全二〇巻・別冊一

別冊

解説(上笙郎)・総目次・索引

\*別冊のみ分売可(二〇、〇〇〇円へ税別)

本体補価格

四六〇、〇〇〇円

(税込定価=四七三、八〇〇円)



## 配本一覧

復刻版巻数 原本号数

原本刊行年

配本年月・価格

第5回配本	第4回配本	第3回配本	第2回配本	第1回配本
第一七巻 第九〇六〜九五七号 第一八巻 第九五八〜一〇〇九号 第一九巻 第一〇一〇〜一〇五二号 第二〇巻 第一〇五三〜一一〇二号	第一三巻 第七〇二〜七五二号 第一四巻 第七五三〜八〇四号 第一五巻 第八〇五〜八五四号 第一六巻 第八五五〜九〇五号	第九巻 第四九七〜五四七号 第一〇巻 第五四八〜五九九号 第一一巻 第六〇〇〜六五〇号 第一二巻 第六五一〜七〇一号	第五巻 第二九一〜三四一号 第六巻 第三四二〜三九三号 第七巻 第三九四〜四四五号 第八巻 第四四六〜四九六号	第一巻 第一〜九五号 第二巻 第九六〜一八九号 第三巻 一九〇〜二三九号 第四巻 第二四〇〜二九〇号
明治二八年 明治二九年 明治三〇年 明治三一年	明治二四年 明治二五年 明治二六年 明治二七年	明治二〇年 明治二一年 明治二二年 明治二三年	明治一六年 明治一七年 明治一八年 明治一九年	明治二〇二年 明治二二三年 明治二四年 明治二五年
一九九三年二月 一〇八、〇〇〇円	一九九三年六月 八八、〇〇〇円	一九九二年二月 八八、〇〇〇円	一九九二年六月 八八、〇〇〇円	一九九一年二月 八八、〇〇〇円
'93年度配本		'92年度配本		'91年度配本

●復刻版刊行にあたって——本誌は、明治三二年二月の第一〇二号以降も数号発行されたと思われるが、原本の散逸が著しく、現在、明治三四年六月の第一一四九号までの、僅か数号が確認されるに留まるため今回の復刻版では収録しておりません。  
なお、第一号、第一〇二号中の第一七七号、第一八〇号、第四九六号、第一〇九六号、第一〇九七号も未発見のため未収録です。原本にお心当たりの方は、編集部までご一報下さい。

●本カタログ中の表示価格は、  
全て消費税を含んでおりません。  
●弊社は注文制です。  
お近くの書店にご注文ください。

## 不二出版

東京都文京区向丘一―二―二  
TEL 〇三(三八一)四四三三  
FAX 〇三(三八一)四四六四  
振替 〇東 京六―九四〇八四